研究と子育ての両立を支援する特別研究員RPD

日本学術振興会 特別研究員RPD
川﨑弥生（かわさき　やよい）

2004年，神戸女学院大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。現在，日本大学商学部で非常勤講師を兼任。専門は認知心理学。著書は『基礎から学ぶ心理学・臨床心理学』（分担執筆，北大路書房）など。

私は現在5年生の男児，3歳の女児，そして，同い年の夫（会社員・エンジニア）と東京で暮らしています。そして，昨年の4月から日本学術振興会特別研究員RPDとして専修大学での研究生活が始まりました。特別研究員RPDは，出産や育児で一度研究を中断した人が再出発（Restart）することを支援する制度で，RPDのRはRestartの頭文字となります。今回は下の娘の中断でRPDに採用されたのですが，これは2回目でして，上の息子の出産の際にも申請し，採用されました。

なお，「育児出産で中断」と書くと女性研究者を対象とした制度と思われがちですが，男性研究者も申請可能で，実際に男性研究者が採用された実績もあります。1回目のRPDの際は第2期で採用期間が2年間でしたが，第3期から採用期間が3年間となり，待遇は特別研究員PDとほぼ同じです。出産から5年以内という縛りはありますが，博士号取得から5年未満という制限はなく，2回まで申請することができます（ただし，子供一人につき1回までの申請）。PDやDCよりも申請の締め切りが早いですが，PDとも併願できます。何より，育児をしながら研究を続けることができるのは本当にありがたいことだと感じています。

私は卒業論文からずっと，実際には起こっていないことを誤って思い出してしまう虚記憶（フォールスメモリ）について研究しています。昨年の7月にハンガリーのブダペストで開催されたInternational Conference on Memoryに研究発表に行きました。家族全員で行くことも考えたのですが，息子の小学校の行事と日程が重なったので，1人で9日間，渡欧しました。娘だけ連れて行くことも考えるには考えたのですが，学会に託児サービスがないこと，フライト時間が長いこと，時差が大きいこと，娘は熱を出しやすいことなどを考慮し，連れて行きませんでした。ありがたいことに，携帯電話でお互いの顔を見ながら子供たちが寝る前や起床後に話すことができ，子供たちの状態は比較的安定していました。

しかし，今までずっと一緒にいた母親が離れたので，娘は7日目くらいから，「ママはまだ帰らないの？」と寝る前に不機嫌になるようになり，帰国して久しぶりに再会してみると，パパっ子だったはずの娘が，「ママー！　ママがいいの！」と言うようになってしまいました。それまでママはいるのが当然で，パパは仕事に忙しく出張も多かったため，パパが大好きだったのですが，ママが長い時間いないことを経験したことが大きく影響したようです。ママっ子になった娘は正直かわいいのですが，保育園の送りやお留守番など，パパっ子のほうがいろいろと助かるので，何かにつけて，「パパすごいね！」，「パパのおかげだね！」などと娘の前でパパを褒め，パパっ子に戻るように仕向け，後日，夫も私よりも長い期間海外出張に行き，無事にパパっ子に戻りました。

普段の生活でもエンジニアである夫の帰りは遅く，土日の出勤もたびたびで，出張も多いため，私が子育てと研究を両立するのにはこのRPDの制度はとても助かります。夫は高校時代の同級生であるため，私にとって同志であると同時にライバルでもあります。出産や子育ての影響が比較的少なく，順調に仕事を進めキャリアを重ねる夫を見ると，正直自分が置いて行かれるような気持ちになることもあります。しかし，ではやはり子供がいなくていいのか？と考えるとそれはそれで寂しいように感じます。RPD最終年度には息子が中学生になり，娘の保育園の送迎もできるようになるので，その頃には常勤職に就けるように，家族で協力して，今できることをしていこうと思います。

海外特別研究員にも再出発を支援するRRAという区分ができたようです。これからさらに研究者が結婚や出産をためらわずに選択できるようになるといいな，と思います。

兄妹のやり取りや違いも面白い